

# 未来のムラ創造プロジェクト

## 未来社会推進機構 小菅区と北原区への移住者募る



地域の人材を募集する左から佐藤区長、出澤副理事長、小林区長

飯山市瑞穂小菅区を拠点に地域活性化の活動に取り組む(一社)未来社会推進機構(吉越明人代表理事)は16日、飯山市瑞穂地区の小菅区(小林道男区長)と北原区(佐藤輝美区長)とともに各区の魅力と自治活動を維持、新たな価値を創出する活動としてエリアマネジメント事業「未来のムラ創造プロジェクト」を推進すると発表した。両区の地域課題を解決し、地域住民とともに活動する移住者を募集する。自治体よりも小規模集落に合わせた移住

者募集は珍しい取り組みで、両区長も期待している。

同機構は、2018年の国立社会保障・人口問題研究所による飯山市の人口推計によると2015年の人口2万1438人が2045年には1万617人に半減するため、人口の流出や過疎化によって地域の伝統や文化が失われようとしていると指摘。同機構と両区で今年5月に連携調印式を開き、今後のあり方を模索。両区の歴史や文化を調べ、住民アンケートと空き家の意向調査を実施し、30年後の2050年を見据えた未来図を作成した。

未来図について、小菅区は水分神(みくまりのかみ)という水の神が祀られ、その後小菅山が北信濃三天修験場として栄えた歴史があることから「水を祀る村」と定めた。募集する人材は、環境や景観保全と修験文化に興味があり、伝統祭事に参加できる人。北原区は

1641年(寛永18)に新田開発を実施したことから「農に生きる村」と定めた。募集する人材は農に対して体力と熱量の強い人。両区とも、年齢・性別不問、地域の共同作業に参加できる人としている。支援策は区内の古民家の空き家や空き地の紹介、農地のあっせん、農家の指導など移住者に全面的な協力をする。

同機構は両区と移住者の仲介、移住者の面談も実施。同機構の古民家再生事業とも合わせ、各区にある空き家を活用して移住者の住居の確保を進める。現在、小菅区では空き家は15件、売買含めて検討中という空き家は2〜3件。北原区では空き家は11件、うち売買含めて検討中の空き家は3〜4件という。

この事業について、同機構副理事長の出澤俊明さんは移住者が地域とのミスマッチで移住をあきらめる事例があるとし、「小さな集

落単位だからこそ地域の課題が明確になり、ミスマッチを未然に防ぐことができる」と指摘。「移住者の人生設計、ライフスタイルを叶えることができる」と語り、来年度は事業を広げる意向を示した。

小菅区の小林区長(64)は、3年に1度、国重要無形民俗文化財にも指定されている柱柴燈籠神事(はしらまつこさいとうしんじ)が執り行われているが、人口減少が続く他の地域から

協力を得ないと伝統行事が継続できない現状にふれ、「神事をやめる、というわけにも行かない」と苦心。「この取り組みで祭りに来て、小菅区を気に入ってもらい、人口が増えれば良い」と語った。北原区の佐藤区長(72)は、すでに区内の移住者がスキニーやネギなどの農家をしていることにふれ、「移住してくれ、農業に従事してくれるとうれしい。30年後にこの地区がうまくいっている」と話していた。